

## 24. ペルシヤ湾とホルムズ海峡

中東の油田地帯であるペルシヤ湾一帯とタンカーの通り路であるホルムズ海峡は、世界経済の根幹を握っている最重要な地域であるとともに世界で最も紛争が多発する地帯でもあるのです。ところが情報の発信は少なく、人々の関心も知識も少ないのが現状ではないでしょうか。このペルシヤ湾を囲む国々は入国を厳しく制限し、人、物ともに世界との交流は極端に少なく、その結果理解し難い地域として関心を示さなくなってしまうようです。



私はこのイスラム社会に中東駐在員として単身で飛び込み、現地の人達と全く同じ生活を長年過ごし、業務の成果は可もなく不可もなく、大過なくやれたことが成果だと自負しており、この話は別の機会に致します。

それでは巨大タンカーに乗船してアラビヤ海経由でペルシヤ湾に向かってみましょう。オーマン湾に入るととたんに熱風が吹いてきて、赤茶けた山肌が見えてくるとホルムズ海峡はもう直ぐです。そして何度も航過した経験がありながら極度に緊張してきます。それは米海軍の艦艇が海峡付近を遊弋しており、湾内で何が起きるか判らない不安が渦巻くからです。海峡は右舷側がケシム島でイラン領、左舷側がオーマン領の半島です。幅は約40kmしかし、大型タンカーが航過できる水域は幅約10kmしかなくここを空船のタンカーと喫水線下30m以上もある満載のタンカーがすれ違うのです。しかも列をなしてくるのですから一瞬の気のゆるみも許されない緊張の連続で、日本人船員はタンカー銀座と称しております。更に湾にはいと無数の小島があり、航路は狭い水域に限定され、指定された航路を航行することになります。そしてまた油田は陸上よりもこのペルシヤ湾の海底の方が多く、海上には無数の石油を汲み出すリグが林立しており、更に海底には石油を流すパイプがありますから、緊急時といえども投錨することは危険です。実際エンジン故障でアンカーを入れたところ海底のパイプを破損してしまいもの凄い額の損害賠償金を請求されたタンカーもあります。そして指定されたシーバースへ向かいます。荷役といっても港へ入ることはありません。このシーバースというのは遙か沖合に300m位の長さで4~5ヶ所に船を舫うためのビットが海上にあり、その中央に原油のパイプとポンプの施設があつて、船とジョイントとすると原油が流れ込んできます。あの重そうな原油が流れるのは蒸気の圧力によるものです。陸地は双眼鏡でやっと見えるくらいの沖合ですし、陸地は砂漠ですから勿論上陸は出来ません。ですから手続きはスピードボートでやって来た係官と船内で全ての事務手続きを行い完了です。TVは受信出来ませんし、ラジオは一日中コーランだけを放送していますから、BBCの短波放送を聴くのが唯一の楽しみです。私が乗っていたタンカーはヨーロッパ向けで、スエズ運河は巨大タン

カーは航行出来ないのでアフリカの南端喜望峰廻りになります。そしてやっと揚げ地であるユーロポートもシーバースですから上陸は出来ません。夜になると遙か水平線上に街の紅い灯 青い灯を眺め侘びしさを十二分に味わいます。スピードボートで上陸も可能ですが、北欧の気象は気まぐれで帰船出来ない怖れがあり、どうしても病院で診察しなければならない患者だけが上陸を許可され、他は船内で過ごすだけになります。重油の揚げ降ろしは一旦始まると途中で止めることが出来ません。これはストップするとパイプの中で固まってしまうので常時流れるように圧を加えており、昼夜兼行での業務です。これも船員の宿命ですから誰も文句もなく、休暇で下船できる日を指折り数えております。ところが科学の発達はとんでもないイタヅラをするものです。通信衛星によって地球の反対側でも懐かしい家族の声を聴けるようになるとしばらくの間虚脱状態になり仕事になりません。新婚間もない二航士は休暇下船直後辞表を郵送してきました。奥さんと離婚騒動があったようです。

話はペルシヤ湾に戻りましょう。奥へ向かって右舷側は全てイラン領ですが、左舷側はアラブ首長国連邦、カタール、バーレーン、サウジアラビア、クエートがあり、いずれも産油国で大金持ちの国々です。

以前はどうだったのでしょうか。第二次大戦迄はこの辺いったいはすべてイギリス政府の支配下にあり、石油生産もイギリス資本が全てを握っておりました。ところが第二次大戦後は民族運動が盛んになり、イランは独立宣言をし、石油生産・販売も自国が主体となって行うことを宣言しました。これに対してイギリス政府はイラン政府と直接取り引きしないように世界に向かって要請したのです。この機会を捉えた出光興産の創業者出光佐三社長の英断で同社所有のタンカー日章丸二世（1万9千トン）を派遣、シャトルアラブ川にあるイラン唯一（当時）の積み出し港であったアバダンでガソリンと軽油を満載し、初めて（1953年5月）外国がイランと直接取引したのがわが国なのです。昭和28年ですから我が国が連合軍による占領が終わってまもなくのことですから大変な決断です。このとき怒ったイギリスはペルシヤ湾で警戒遊弋中の駆逐艦に追跡を命じ、日章丸は公海までへの脱出に危うく成功しています。この事実は後に東宝で三橋達也主演で映画化されました。

その後は経済自由の原則でこれらの国々と直接取引となりました。更に鉱区を決めて開発の入札を行い、各国、各会社は競って入札に応じ、高額で落札しても油田に突き当たるかどうかは神のみが知る賭けみたなもので、空振りに終わることが多いようです。最初のうちは陸上だけだったのですが、技術が進歩し海底油田の開発が可能になると、海上を区割りした鉱区を決めこれを売り出したのですから、沿岸国は勞せずして濡れ手に粟のオイルマネーの流入です。砂漠の民であるベドウィンの人々の暮らしは一変しました。

その例をドバイで見てみましょう。国の位置はホルムズ海峡を入れて直ぐにトリカジ（左舷側）。オーマン国に接したアラブ首長国連邦の一つでドバイ首長国です。私が初めてドバイで原油を積んだのは1972年でしたが砂漠の中に集落があるだけでした。次に訪れたときは

首長が国際空港を造るんだと計画しておりました。次に訪れたときは国際空港がなんと3ヶ所あり、その後は中東駐在員として何度も訪れました。何しろ目の前の海底が大油田なので、すから膨大なオイルマネーが流入し、それをどんどん使わなければならないという宿命、面積は北海道位の大きさをルブアルハリ砂漠の一部ですから国土の全てが砂漠です。ここに近未来型の大都市を建設しようとするのですからまさに世界の最先端をゆく実験都市の建設です。必需品は全て世界中からの輸入ですから海運の走り使いを努める身としてはウロウロと走り回らなければならなかったのです。その頃は建設ラッシュで活気に溢れ、建設労働者は大半がパキスタンからの出稼ぎ、家事労働やサービス業を努める女性はフィリピンからの出稼ぎでした。

そして近年その成果として誇示するのは、人類史上最も高いビル「ブルージ・ドバイ」世界初の海中ホテル「ハイドロポリス」 椰子の木をかたどった人工島「ザ・パーム」。

そして世界の金融機関として確固たる地位を築き、2020年の夏季のオリンピック誘致にも名乗りを上げている急成長の羨ましい都市国家です。しかし僅か120万の人口ですから広島市位いでしかも本来の住民である人達は半分もいなく、外国からの出稼ぎが人口の半分以上ですからある面では脆さを持ち、かつリーマンブラザースの破綻による金融危機の余波を受け翳りが見えてきたと外電は報じていますがどうなっているのでしょうか。

在職中にこの地で知り合った輸入業者がおりますが、その人が言うのには最大の楽しみはサイクロンが荒れ狂うレーンシーズン中にインドに行きホテルのテラスから1日中雨の降るのを見ているのが至福の一時なんだそうです。そういえば砂漠のなかの地方都市の繁華街を歩いていた時突如雨が降ってきたことがあります。そのときあわてて商店の軒先に駆け込みましたが、それまで静かだった道路に各家から人々が飛び出してきて天を仰いで大騒ぎです。道路は人で溢れ自国のチームがワールドカップで優勝したよな悦びようでした。

雨が降るのは1年で1~2回でそれも30分位とのこと、我が国のように雨の日は天気が悪い日だと称するのはほとんどもない冒涇で、雨様のご来訪を感謝すべき日なのです。

もう一つカタールについて、かつての「ドーハの悲劇」をご記憶でしょうか。1993年10月カタールの首都ドーハで行われたサッカー、ワールドカップアジア地区最終予選で日本代表とイラク代表との試合で試合終了間際のロスタイムにイラクが同点ゴールを決め、日本が予選敗退が決まった瞬間 日本中に悲鳴が上がったその国についての話題です。位置はサウジアラビア側からペルシヤ湾に160kmも突き出た半島で、カトゥラ(噴き出すの意)がカタール半島になり、それが国名になっております。国土の大半は不毛の砂漠、従って漁業と真珠貝の採取を生業とする僅かな人々が住んでいたに過ぎない僻地に大油田が発見されたのです。半島の付け根辺りに石灰岩で出来た山地がありますが、最高峰が海拔103mですから一寸した丘程度です。しかし現地では山脈と称しており、この山地の地下に油田が眠っていたのです。さらに海底に世界最大級のガス田が発見されたのですから世界中から資本が集中し

人が集まり、大都市が建設され、国家が誕生した訳です。私も建設途上の時に PCC（自動車運搬船）でトヨタ・ニッサンの四駆のジープを陸揚げしたことがあります。その頃は満足な道路はなく四駆が必需品だったのです。この時はドーハに接岸でしまったから上陸できましたが、現在のような大都会ではなく砂漠のなかに突如鉄骨が組み立てられているのが乱立している異様な風景でした。

現在は超近代的な都会で世界の医療センターになろうとしているようです。もう一つ我が国関連はサッカーに力を入れ、やがてはワールドカップを狙っているようで、同じアジア地区ですから強力なライバルになるでしょう。しかし全人口 120 万の国ですから自国民を養成するわけではありません。世界中から有力選手を豊富なオイルマネーでリクルートすることでチーム造りに励んでおり、実際 J リーグからもシーズン中にもかかわらず有力選手が引き抜かれて突如姿を消しており由々しき問題となっております。

ペルシヤ湾沿岸国はオイルマネーの流入でさぞ繁栄と平和を謳歌していると思いがちですが、豊富なマネーは紛争の原因にもなるのです。産油国と非産油国、民族、部族の対立、同じイスラム社会でもスンニ派、シーア派の鋭い対立 紛争の種は尽きることがありません。しかも砂漠の民としては部族の為に戦うことが最高の誇りなのです。

なにしろ紛争が絶え間ない地域で、イラン革命、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク侵攻等々、そしてペルシヤ湾内を航行中の全船舶が攻撃対象となるタンカー等無差別攻撃の宣言によって多くの船舶が攻撃され、ギリシャ籍と韓国籍の貨物船は炎上沈没し船員の犠牲者も出ております。戦闘機とガンボートの攻撃は執拗でしたが、幸いなことには戦闘機が発射したミサイルは対戦車用だったので船舶を沈めるだけの威力はなく、それほどの被害にはならなかったようです。ただし機雷で沈没や被害を受けた船舶があります。この掃海のために海上自衛隊の掃海艦艇が派遣されて活躍したことはご記憶の通りです。

更にいえば海上自衛隊が持つ掃海技術は世界一と絶賛されていること、掃海艇が木造（磁気を遮断できる）である造艦技術に誇るべきものがあります。

掃海後、機雷事故が全くありませんから海底にある磁気機雷まで完全に除去した証で、海底に潜って磁気を丹念に調べ尽くし除去した苦勞と努力、そして高度の技術に対し世界の海運界は賞賛し感謝したのですが、日本国内では完全な無視か、非難する声を聴いて驚きました。原油がどうして運ばれているのか全く関心のない人達なのでしょう。

ペルシヤ湾、ホルムズ海峡を安全に航行できる我々としては感謝あるのみです。

ただ次にくるものは、イランの核施設問題で、もしこれらの施設が攻撃されたら直ちにホルムズ海峡に船を沈め封鎖するとイラン革命防衛司令長官が宣言しています。もし実行されたら原油輸入の 80%がここを通る我が国が最大の被害国になり、経済は完全に麻痺します。

マンモスタンカー



船の長さ、375m  
船の幅、56m  
深さ 32m  
喫水 24m



シーバースで原油積載中



写真解説

ペルシヤ湾には夢のような超近代的な街があり、一寸離れると日干しレンガの家があり、マンモスタンカーと 2000 年前と同じ葦船が同一海面を航行しています。

世界経済のエネルギー源を握る力とメソポタミア文明の世界が同居している平和な一面と、何時爆発するか知れない不気味な世界の火薬庫でもあるのです。



